

〔資 料〕

アメリカ合衆国の死刑状況（その4）

—1992年—

辻 本 義 男

- | | |
|----------------------------------|--|
| 1 はじめに | 5 精神障害者・精神薄弱者の処刑 |
| 2 少年犯罪者と死刑 | 5・1 1992年に処刑された精神障害者・精神薄弱者 |
| 2・1 少年に対する死刑判決 | 5・2 ルイジアナ州最高裁判所の判決—Michael Owen Perry 事件 |
| 2・2 1992年に死刑を言い渡された少年犯罪者 | 6 州の立法およびその他の進展 |
| 2・3 死刑を宣告された少年犯罪者（1992年12月31日現在） | 6・1 コロンビア特別区における死刑に関する住民投票 |
| 2・4 Johnny Garrett のケース | 6・2 1992年に認められた特赦 |
| 3 死刑裁判における弁護人 | 6・3 Robert Alton Harris のケース |
| 3・1 Roger Coleman のケース | 7 1992年に処刑された死刑囚 |
| 4 人種と死刑 | |
| 4・1 Delma Banks のケース | |
| 4・2 William Andrews のケース | |

1 は じ め に

1992年末に、36州に連邦軍法と連邦市民法による死刑囚が2,636人いて、1992年中に31人が処刑された。これは1970年代中頃に死刑が再導入されて以来、年間で最多の処刑数であり、これで死刑の再導入以来の処刑の合計数は188人に達した。カリフォルニア州を含む4州が、25年ぶりに処刑を行

った。

14の死刑廃止州のうちの12州の議会が、死刑の再導入に関する法案を提出したが、そのいずれも可決されるにいたらなかった。コロンビア特別区の住民が、連邦上院が特別区に死刑の再導入を求めた法案に投票することが求められたが、特別区の投票者は、法案を圧倒の多数で退けた。

1992年に処刑された者のなかに、慢性的な精神病で、脳に障害があった精神障害の少年犯罪者、Johnny Garrett がいた。Johnny Garrett は、1992年2月11日にテキサス州で致死薬注射により処刑された。アメリカ合衆国は、国際的な基準に反して犯行時18歳未満の者を処刑する世界でも数少ない国の1つである⁽¹⁾。

精神異常、脳障害あるいは精神薄弱であった6人の囚人が、1992年に処刑された⁽²⁾。その中の1人に Nollie Martin がいた。彼は少年時代にうけた重い頭部傷害の結果、脳に障害があったが、1992年5月にフロリダ州で処刑された。1992年1月にアーカンソー州で黒人の精神障害者の Ricky Rector の処刑に立ち会った者は、技官が致死薬を注射するための適当な血管をさがし当てている1時間ばかりのあいだ、処刑室から呻き声や叫び声が聞こえたと報告している。Ricky Rector は何かを感じとって、作業を行っている処刑チームに助けを求めたのであろう。

1992年に処刑された囚人の多くは、裁判所選任の弁護人が、量刑段階で精神病の病歴や、虐待あるいは遺棄された成育歴を含む重大な軽減事由を提出しなかったなどのように、公判で十分な法的代理を得られなかったことを指摘する証拠が多くある。バージニア州で、1992年5月に有罪に対する疑いがあったにもかかわらず Roger Coleman の処刑が行われた。Coleman はいまままでに謀殺に関する事件を扱った経験がない弁護人に弁護された。その弁護人は多くの証拠上の問題を調査しなかった。上訴を担当した Coleman の弁護人は、バージニア州法に疎く、不注意で期限に遅れて州裁判所に上訴を提起したため、手続上の理由でその上訴を却下されてしまった。合衆国最高裁判所は、「Coleman は、手続的な怠慢に結果する弁

護人の過誤のリスクを負わなければならない」として、1991年6月に6対3でその上訴を棄却した。

合衆国における死刑の適用にみられる人種差別も大きな問題である⁽³⁾。1976年から1992年末までに処刑された188人の囚人のうちの83パーセントは、白人の被害者が関係する犯罪で死刑を宣告されている。

Delma Banks は、検察官が陪審員候補者から黒人の陪審員を排除した後、全員白人からなる陪審によって死刑を宣告された黒人の囚人の1人である。1992年にテキサス州は彼に対し7つの処刑日を定めたが、そのいずれをも停止した。1993年初現在、Banks は弁護人が彼に代わって提訴した上訴の結果を待っているところである。弁護人は Banks が公判に付された管轄区の検察官が、Banks の公判に先立つ少なくとも6年前から現在まで、人種を理由として審理陪審から黒人の陪審員を故意に排除していたという証拠を提出した。

黒人の Andrew Williams も全員白人の陪審により死刑を宣告され、彼に死刑を言い渡した陪審の決定に影響を与えていたと思われる人種偏見があったという疑惑にもかかわらず、1992年7月30日にユタ州で処刑された。

1992年に処刑されることになっていた囚人の中に、Leonel Herrera がいた。彼は2人の警官の謀殺で有罪を宣告されたが、無実だといわれている。Herrera は、処刑が行われることになっていた2日前にテキサス州控訴裁判所により処刑の猶予を認められ、合衆国最高裁判所に別の男性が真犯人であると主張する手続的に遅れた証拠を考慮することを求め、それが認められたのである。1993年1月23日に、合衆国最高裁判所は6対3で、無実の遅きに失した証拠を提出した死刑囚は、通常、合衆国の裁判所に新たな審理を求める資格を有しないとの決定を下した。William H. Rehnquist 長官が書いた多数意見は、死刑裁判で、公判後になされた真実の無実に関する「完全に説得的な」証明があるとき、その被告人の処刑は憲法に反するものとし、「真実の無実の考慮を求める主張は、そのような仮定された権利は必然的に異常に重要なものであることを示す入口であるから」であると

したが、最高裁判所の多数意見は、この入口が Leonel Herrera まで届かなかったとしたのである。18ページに及ぶ反対意見を書いた Harry A. Blackmun 判事は、「無実であることを示すことができる者の処刑は、単純な謀殺に危険なまでに接近している」と非難した。Herrera 裁判における最高裁判所の多数意見は「特赦（による減刑）は……司法的な手続が使いはたされたときに、司法の過誤を防止するための歴史的な治癒である」と述べた。しかし、死刑が再導入されて以来、テキサス州恩赦・仮釈放委員会 は多くのケースで提出された強力な根拠があったにもかかわらず、死刑事件で特赦を勧告することはなかった。

他の州では、1992年に2人の囚人に特赦が認められた。1月に Douglas Wilder バージニア州知事は、執行数時間前に Herbert Bassett の死刑を終身刑に減刑し、同じ月にノースカロライナ州の James Martin 知事も、処刑7日前にコハリエ (Coharie) インディアン の Anson Avery Maynard に州知事の特赦を与えた。

以下において、アムネスティ・インターナショナルが公開した資料、とくに1993年4月に発表した「アメリカ合衆国 死刑 1992年の進展」(*UNITED STATES OF AMERICA Death penalty developments in 1992*; AI Index: AMR 51/25/93)、法防衛基金「死刑廃止のための全国連合」(Legal Defence Fund: National Coalition to Abolish the Death Penalty) などの資料によって、1992年におけるアメリカ合衆国の死刑を概観する。

なお、1987年から1991年までのアメリカ合衆国の死刑状況は、中央学院大学法学論叢5巻2号(1992年)、6巻1号(1992年)および6巻2号(1993年)で紹介したので参照していただきたい。

注

- (1) 少年犯罪者の死刑に関しては、辻本義男「少年と死刑——最近におけるアメリカの事例」法の支配72号(1988年)、同「アメリカの少年死刑囚」犯罪と

非行91号（1992年）。

- (2) 精神障害者の処刑に関しては、辻本義男「アメリカにおける死刑と精神障害者の問題」中央学院大学法学論叢1巻1号（1987年）、同「死刑と医の倫理」中央学院大学法学論叢3巻1号（1990年）。
- (3) 人種差別に関しては、辻本義男「アメリカにおける人種差別と死刑」中央学院大学法学論叢2巻1号（1989年）、同「アメリカ・インディアンと死刑」中央学院大学法学論叢7巻1号（1993年）。

2 少年犯罪者と死刑

1992年末現在、合衆国の死刑囚2,636人中の34人が、犯行時18歳未満の少年犯罪者であった。アラバマ州、フロリダ州、ジョージア州、ケンタッキー州、ルイジアナ州、ミシシッピ州、ミズリー州、ノースカロライナ州、オクラホマ州、ペンシルバニア州、テキサス州、バージニア州およびワシントン州の13州に、死刑を宣告された少年犯罪者が、白人16人、黒人15人、そしてヒスパニックが3人いた。死刑を存置している36州のうちの24州に、少年に死刑を科すことを認める法律がある。1992年に、ジョージア州、ミシシッピ州、オハイオ州およびペンシルバニア州の4州が、少年犯罪者の処刑を禁じる法案を提出したが、そのいずれもが成立しなかった。1985年から1992年末までに、5人の少年犯罪者が処刑された。最も近くでは、Johnny Garrett が1992年2月11日にテキサス州で処刑されている。

世界的に少年犯罪者の処刑はきわめて稀である。法律上死刑を存置している70以上の国で、犯行時18歳未満の者に対する処刑を廃止している。合衆国は、過去20年間に少年犯罪者を処刑したことが知られている7か国のうちの1か国である——他の6か国は、最低年齢を18歳に引き上げたバルバドスの他に、イラン、イラク、ナイジェリアおよびパキスタン⁽¹⁾、および少年の処刑が行われたとの報道があったバングラデシュである⁽²⁾。未成年者への死刑の言渡は、市民的及び政治的権利に関する国際規約および米州人権条約を含む国際人権条約や基準の明らかな違反である。合衆国政府は、1977年に上の2つの条約に署名し、1992年4月に市民的及び政治的権利に

関する国際規約を批准した。しかし、同規約の批准にあたり、合衆国政府は18歳未満の者に死刑を科すことに対しては「合衆国憲法の拘束に従う」権利を留保した。なお、1984年に国連社会経済理事会が採択した「死刑に直面している者の権利の保護の保障に関する決議」(決議1984/59)は、犯行時18歳未満の犯罪者の処刑を禁止している(保障3)。

1993年1月に、合衆国最高裁判所は5対4の僅差で、テキサス州の死刑法は量刑手続の際に、独立した軽減事由として被告人が発育期であることを考慮することを陪審に認めないことは違憲であるとした *Graham v. Collins* 事件における主張を却下した。最高裁判所はその主張の実態を考慮することなく、それに代えて、上訴人である Gary Graham (17歳の犯罪者) は、彼の事件に遡及して適用され得ない「新しい法の支配」を求めているものであると判示したのである。反対意見は、この判決を厳しく論難した。

1991年10月、アムネスティ・インターナショナルは「アメリカ合衆国：死刑と少年犯罪者」(USA; *The Death Penalty and Juvenile Offenders*; AI Index: AMR 51/23/91) と題する報告書を公表し、合衆国の少年犯罪者に対する死刑の適用に対するキャンペーンを開始した。この報告書は、合衆国の現行法により死刑を宣告された23人の少年のケースに関するアムネスティ・インターナショナルの調査結果の報告書である。アムネスティ・インターナショナルの調査は、死刑が公正に適用され、最も凶悪な犯罪と最も非難されるべき犯罪者にのみ科されるべきであるとする合衆国の死刑法における保障は、多くの少年死刑囚のケースでは満たされていないことを明らかにした。これらの少年死刑囚の大部分は、恵まれない生い立ちで、少なくとも12人はひどい身体的あるいは性的な虐待を受けており、10人は一様に幼いときから薬物またはアルコールを飲用していたことが明らかになった。多くのケースで、両親にアルコール中毒の病歴がみられ、少なくとも14人の囚人は精神病か脳障害にかかっていた。大部分は平均以下の知能で、4人が境界線上の精神薄弱、1人が著しい遅滞を示していた。驚くほ

ど多くの事件で、審理陪審は死刑判決に対する軽減事由として被告人の精神能力や生い立ちを考慮する機会が与えられなかったことが明らかになった。これは、裁判所選任の弁護人が、被告人の生い立ちについて適切な調査をしなかったことと、公判の際に適切な情報を提供しなかったためである。ある事件では、被告人が発育期にあるということ自体が、量刑審理で軽減事由として言及も考慮もされなかった。

2・1 少年に対する死刑判決

アラバマ州で、1992年3月に黒人の Frederick Lynn が、仮釈放なしの終身刑を再び言い渡された。Lynn は、1981年に押し込み強盗で Marie Drigger Smith を謀殺して死刑を宣告された。犯行時16歳であった。彼は、最初1983年5月に死刑を宣告されたが、その有罪が上告によって破棄され、1986年にふたたび有罪を宣告され、死刑を言い渡されたのである。2度目の死刑の言渡は、Lynn の弁護人と州の検察官との間で、弁護人が再審理の請求を行った後は、刑の軽減の審理で死刑に相当する謀殺に対する有罪の決定に異議を申し立てないとの合意に達した結果行われたものであった。

1992年1月に、17歳のときに犯した犯罪に対しアラバマ州で死刑判決を宣告された白人の Andrew LeGare に、4度目の再審理の結果、終身刑が言い渡された。LeGare に対する死刑判決は、それまでに上訴によって3度も覆されていた。LeGare は、1977年に黒人の Geroge Hill を殺害して、1977年11月に死刑を宣告されていたものであった。

2・2 1992年に死刑を宣告された少年犯罪者

1992年に、4人の少年犯罪者に死刑が宣告された。フロリダ州で白人の Jeffrey Farina に、16歳のときに犯した犯罪に対し死刑が宣告された。アラバマ州で白人の William T. Knotts に、17歳のときに犯した犯罪に対し死刑が宣告された。テキサス州とバージニア州で、ヒスパニックの Miguel Martinez と黒人の Dwayne Allen Wright に、それぞれ17歳のときに犯し

た犯罪に対し死刑が宣告された。

2・3 死刑を宣告された少年犯罪者（1992年12月31日現在）

州 氏名	生年月日	犯行年月日	犯行時 の年齢	性別／ 人種	性別／ 被害者の人種
アラバマ州					
Davis, Timothy	1961/ 3/18	1978/ 7/20	17	M/W	F/W
Hart, Gary		1989/ 8/12	16	M/B	M/W
Knotts, William		1989/10/18	17	M/W	F/B
Slaton, Nathan	1969/10/ 5		17	M/W	F/W
フロリダ州					
Allen, Jerome	1975/ 4/19	1990/12/10	15	M/B	M/W
Bonifay, Janes		1991/ 1/26	17	M/W	M/W
Ellis, Ralph		1978/ 3/20	17	M/W	2×M/W
Farina, Jeffery		1992/ 5/ 9	17	M/W	F/W
LeCroy, Cleo		1981/ 1/ 4	17	M/W	M/W F/W
Morgan, James	1960/11/28	1976/ 6/ 6	16	M/W	F/W
ジョージア州					
Berger, Christopher	1959/12/30	1977/ 9/ 4	17	M/W	M/W
Williams, Alexander		1986/ 3/ 4	17	M/B	F/B
ケンタッキー州					
Stanford, Kevin	1963/ 8/23	1981/ 1/ 7	17	M/B	F/W
ルイジアナ州					
Dugar, Troy	1971/ 5/ 1	1986/10/26	15	M/B	M/W
ミシシッピ州					
Foster, Ron	1972/ 1/ 8	1989/ 6/10	17	M/B	M/W
ミズリー州					
Lashley, Frederick	1964/ 3/10	1981/ 4/ 9	17	M/B	F/B
Wilkins, Thomas	1969/ 1/ 7	1985/ 7/27	16	M/W	F/W
ノースカロライナ州					
Adams, Thomas	1969/ 1/ 7	1987/12/13	17	M/W	F/W
オクラホマ州					

Hain, Scott	1970/ 6/ 2	1987/10/ 6	17	M/W	M/W F/W
Sellers, Sean	1969/ 5/18	1985/ 9/ 8	16	M/W	M/W
		1986/ 3/ 5			F/W M/W

ペンシルバニア州

Blount, John		1989/ 9/28	17	M/B	2×M/B
Hughes, Kevin	1962/ 3/ 7	1979/ 3/ 1	16	M/B	F/W
Lee, Percy		1986/ 2/26	17	M/B	2×F/B

テキサス州

Barraza, Mauro		1989/ 6/14	17	M/H	F/W
Cannon, Joseph	1960/ 1/13	1977/ 9/ 3	17	M/W	F/W
Cantu, Ruben	1966/12/ 5	1984/11/ 8	17	M/H	M/W
Carter, Robert	1964/ 2/10	1981/ 6/24	17	M/B	F/H
Graham, Gary	1963/ 9/ 5	1981/ 5/13	17	M/B	M/B
Harris, Curtis	1961/ 8/31	1978/12/12	17	M/B	M/W
Martinez, Miguel		1991/ 1/18	17	M/H	M/W と 2×M/H
Robert Willis	1967/ 1/28	1985/ 1/17	17	M/B	F/W

バージニア州

Thomas, Chris		1990/11/10	17	M/W	F/W M/W
Wright, Dwayne			17	M/B	F/B

ワシントン州

Furman, Michael	1971/ 6/22	1989/ 4/27	17	M/W	F/W
-----------------	------------	------------	----	-----	-----

略語：M=男性 F=女性 B=黒人 W=白人 H=ヒスパニック

資料：オハイオ州クリーブランド州立大学の Victor L. Streibe 教授の調査統計（1993年2月1日）と、有色人種地位向上全国協会の法防衛・教育基金（NAACP Legal Defense and Educational Fund, Inc.）およびアムネスティ・インターナショナルによる。

2・4 Johnny Garrett のケース

1992年2月11日、Johnny Garrett は1970年代に死刑が再導入されて以来、合衆国で処刑された5人目の、テキサス州では現行法により処刑された3人目の少年死刑囚となった。

Garrett は、1981年10月に、76歳の白人の修道女の強姦殺人で、1982年9月に死刑を宣告された。犯行時17歳であった。彼は長期にわたる精神病の

病歴があり、児童期にひどい肉体的および性的虐待を受けていた。この情報を、1982年の公判の際の陪審は用いることができなかった。1986年から1982年の間に彼を診断した3人の精神医によれば、Garrettは児童のときに受けたひどい頭部傷害の結果、極度の精神障害、慢性の精神病および脳障害にかかっていた。彼は、テキサス州で囚人の処刑のために使用される致死薬注射は、自分を殺すことはないという妄想にとりつかれていたと伝えられる。

Garrettの教育および家庭環境は、1988年に彼を診察した心理学者によれば、「28年以上におよぶ実務経験で出会った中で、最も過酷な虐待と遺棄の生い立ち」であったというものであった。心理学者の報告によれば、Garrettはしばしば実母や継父に手で、あるいは革帯で殴打されていた。ベッドに洩らしたり、汚したりすると、排泄物に鼻を擦りつけられた。泣き止まなかったときに、熱く焼けたストーブのバーナーの上に座らされたこともあり、その火傷の跡が残っていた。

医師の報告によれば、Garrettは彼を性的な慰み者として他人に貸し与えていた継父にレイプされていた。14歳から、異常な性行為を行うよう強いられ、ホモセクシャルのポルノ映画にも出演するよう強制された。10歳の時に、家族から最初にアルコールと薬物を教えられ、その結果、有機溶剤や覚せい剤のような脳障害を引き起こす物質を含む危険な薬物の乱用に耽った。

Garrettは、バチカンのジョン・パウロ法王⁽³⁾やテキサス州の宗教団体の特赦の訴えにもかかわらず処刑された。1992年1月初めにテキサス州大僧正は、テキサス州恩赦・仮釈放委員会にGarrettの死刑を仮釈放なしの終身刑に減刑するよう要請した声明を公表した。その声明は「私たち、宗教的指導者は、わが国における暴力の増加を深く憂慮する。暴力は、結果としてより多くの暴力を生む。同時に、死刑はテキサス州やその他の州で殺人を抑止するという絶対的な証拠はないのである」というものであった。被害者のTadea Benzが属していたAmarilloの修道院(Franciscan Sisters

of Mary Immaculate) も特赦の要請を行った。

Garrett は1992年1月7日に処刑されることになっていたが、テキサス州の Ann Richards 知事は、「シスターからの請願は、被害者の家族からの請願と同じ重みをもっている」として州の恩赦・仮釈放委員会に事件の考慮のための猶予を与えるために、30日間の刑の執行の停止を認めた。Richards 州知事が処刑の停止に介入したのは、1990年に就任して以来はじめてであった。しかし、恩赦・仮釈放委員会は Richards 州知事に Garrett に対する特赦を却下するよう勧告した。

注

- (1) 辻本義男・辻本衣佐編著『アジアの死刑』155頁（成文堂、1993年）。
- (2) 前掲注(1)161頁。
- (3) バチカンからの手紙には「法王は度量のある慈悲深い刑の執行をと祈っていらっしゃる。寛大さはこの社会において、非暴力、相互尊敬、相互理解を高めるために非常に重要なことである」と書かれていた。なお1992年1月13日の *Miami Herald* に寄稿したコラムニスト Tommy Benton は「年老いたシスターが、自分の部屋で犯され殺されているのを発見した同僚のシスターらは、Danny Hill 検察官が現場に足を踏み込んだ瞬間感じたのと同じ苦しみと恐怖を感じたに違いない。だが、彼女たちは慈悲と許しの道を進み、犯人の Garrett だけでなく人類すべてへの憐れみを求めているのだ」と書いている。（「月刊政界」14巻3号89頁（1992年））

3 死刑裁判における弁護人

死刑事件の貧困な被告人には、事実審と州最高裁判所への上訴に限り州が報酬を支払う弁護人が付される。その後の上訴に対しては、州が報酬を支払う弁護人の提供を求める権利は与えられない。しかし、1988年以降、連邦の基金が多く州で「救済センター」(resource centres) ——とくに、上訴の際に死刑事件の被告人の法的代理を行うことを目的とする——の設立を援助した。これらのセンターは、公益を目的として、報酬なしで事件を扱う練達した弁護士の発掘に力を注いだ。多くの州は、現在、州および

連邦のヘイビース・コーパスの上訴のための基金を準備している。しかし、事態は前よりはよくなったが、このような事件を扱う弁護士はいまなお不足している。

事実審で死刑事件の被告人に与えられる法的代理の貧弱さは、いまなお重大な関心事である。多くの死刑事件の被告人は、自身の弁護人をもつことができず、裁判所選任の弁護人——特定の事件の処理のために事実審を行う、裁判所から任命された弁護士——、あるいは公費選任弁護人——法律扶助事件にとくに付される弁護士で、州が設置した事務所に属している弁護士——により代理される。実際、多くの死刑事件の被告人は、とくに南部諸州においては、僅かな報酬しか支払われない裁判所選任の弁護人に代理されている。

サウスカロライナ州で1992年12月に、州最高裁判所は死刑相当の謀殺で起訴された貧困者を代理する弁護人の報酬と費用に対する非現実的な制限は、死刑事件における弁護人の効果的援助を保障することができないと判示した。この判決の中で州最高裁判所は、死刑事件の州選任の弁護人に対するサウスカロライナ州の時間給は全国最低で、死刑の事実審1件あたりの最高限度額は5,000ドルであるとした。この制限内で、専門家あるいは調査員の業務に対しては2,500ドル、私選弁護人は法廷内時間に対しては1時間あたり15ドル、法廷外時間に対しては1時間あたり10ドルの制限がふさされていた。

カリフォルニア州においても死刑囚の上訴を代理する弁護士がはなはだしく不足しており、州最高裁判所は1993年3月に、弁護人がいないために事件が遅延している死刑囚のために弁護士の募集業務を行うことを決定した。この決定は、カリフォルニア州で弁護士のいない死刑囚の数が最高記録を示したときに行われたものである——当時の死刑囚の約4分の1にあたる73人の死刑囚に弁護士が付されていないと報告されている。このうちの約半数は、2年以上前に死刑を宣告されていたが、その上訴を処理する弁護人がいなかった。この改革的な規定は、証拠審理のために事実審裁判

所に死刑裁判が付されるとき、練達した公判弁護士が上訴弁護士に助力することを認めた。従来、死刑裁判における弁護士の募集はカリフォルニア州上訴プロジェクト（California Appellate Project : CAP）が行っていたが、同プロジェクトはこの規定ができた後も死刑裁判での弁護士の援助を継続して行うことにしている。CAPはこの改革を歓迎したが、死刑囚を代理する弁護士の質が低下するとの懸念を表明する弁護士もいる。1992年9月に、あたらしき任命された裁判所モニター（court monitor）が面接した結果、死刑裁判で死刑囚を代理する8人の弁護士を採用した。新聞報道によれば、この大部分はいままでに死刑裁判を扱った経験がない者であるということである。

テキサス州法曹協会雑誌（*Texas Bar Journal*）によれば⁽¹⁾、テキサス州は合衆国で最も多くの弁護士に代理されていない死刑囚をかかえているということである。有罪決定後の上訴段階にある死刑囚198人のうち、31人に代理をする弁護士がいなかった。テキサス州法曹協会が、州の地方法曹協会や弁護士事務所の援助を得て、ボランティアの弁護士を募集したので、この状況は改善されつつある。多くの死刑囚を抱える他の州と同様に、テキサス州では直接上訴後の死刑事件の上訴に対する州の基金を準備していない。

困窮者のために弁護士を登録するルイジアナ州の制度は、1992年2月にニューオーリンズの裁判官により違憲とされた。裁判官は登録することによって、「刑事被告人の十分に資格を有する弁護士により援助を受ける憲法上の権利が否定される」⁽²⁾ ことになるとして、州議会にそのような欠陥を有する制度の改善策をとるよう命じた。この決定を伝える際に、裁判官は「意義のある代理が行われていないので、罪状認否手続の際に無実の者が有罪の答弁を選択する可能性が大きい」⁽³⁾ と述べた。この決定は、ルイジアナ州の公費選定弁護人が行った動議に対してなされたものである。

1992年に処刑された者の多くは、たとえば、精神病あるいは虐待の生い立ちを含む重大な軽減事由を量刑審理で提出しなかったという裁判所選定

弁護人の過誤で、事実審の際に不十分な法的代理しかなされていなかったことを証拠は示している。

3・1 Roger Coleman のケース⁽⁴⁾

Roger Coleman は、その有罪に関する疑いがあったにもかかわらず、1992年5月20日にヴァージニア州リッチモンド郊外の刑務所で電気椅子で処刑された⁽⁵⁾。

Coleman は、1981年3月10日の深夜、バージニア州 Grundy において義理の姉 Wanda McCoy を強姦した後殺害したとして有罪を宣告されたが、刑務所にいた11年間ずっと変わらず無実を訴え続けていた。

Coleman は、事実審でいままでに強盗殺人事件を扱った経験がない弁護人たちに代理されたが、この弁護人は Coleman のアリバイを含む多くの重要な証拠を調査しなかった。弁護人は事実審の量刑段階でなんらの準備も行わず、Coleman が幼い時に両親に遺棄され、虐待と貧困に耐えたという事実を含む軽減事由を提出しなかった。証人も出頭することができたにもかかわらず、量刑審理の際に Coleman のために証言するために法廷に呼ばれることもなかった。

犯罪の発生地であり、Coleman の弁護人が裁判地が変更されるように要請した Grundy の小さな町では、公判前に広範囲にわたる、偏見に満ちた世評が広がっていた。3日間にわたって裁判が開かれたとき、裁判所の外では「死刑を」と書かれたプラカードが並び、傍聴希望者の長い列ができた。しかし、弁護人は審理の準備も行わず、動議を支持するために準備する宣誓口述書も準備しなかった。Coleman に有罪を宣告し、死刑を言い渡した陪審員の少なくとも1人は、事実審が開かれる前に Coleman は有罪であるという強い意見をすでにもっていた者であったという証拠がある。

Coleman は、上訴の際には、有能な、しかしバージニア州の法律に精通していないボランティアの弁護人たちに代理された。1986年に州の裁判官が Coleman の請願を退けた時、弁護人は州最高裁判所に上訴の通告をす

る時間的な制限を誤り、不注意で1日遅れて事務手続を行った。バージニア州の検察官は最高裁判所に「手続的欠陥」を理由にその実体を審理することなく上訴を却下するように求めた。最高裁判所は、1行の決定で却下した。1991年6月、合衆国最高裁判所は、6対3で、弁護人の手続的な過誤のため、Colemanは有罪および死刑に関する連邦の再審理の権利を喪失したと判示した。多数意見で、O'Connor判事は、州裁判所に対し適切な尊敬を払う必要と、刑事裁判で不確実性と遅延を認めなくてはならない州の職員を保護する必要について述べ、「Colemanは手続的欠陥という結果にいたった弁護人の過誤のリスクを負わなくてはならない」とした。3人の反対意見の判事は、個々人の憲法上の権利の保護よりも州の利益を重視した多数意見を非難した。

1992年5月18日、Douglas Wilder州知事はColemanに対する特赦を退けた。記者会見でこの決定を公表する際に、Wilder州知事は「私は彼の無実を確信していない」と語った。州知事はColemanを有罪と考えるとは明言はしなかったが、処刑は「実質的に正義に反するものではない」と主張した。5月20日のニューヨーク・タイムズは「州知事は、特赦の要件を厳しくした」とWilder州知事を強く批判した社説を掲げた。

その後Wilder州知事は理解しがたい行動を行って、Colemanを処刑の日に嘘発見機テストにかけるとを認めた。しかし、Colemanはこれを拒否した。そのようなテストは信頼できないので、一般に裁判所では認められていないものであり、Colemanの弁護人も彼が置かれている情緒的に不安定な状態は、血圧によるテストの結果を歪めると抗議した。Wilder州知事は、新聞に「Colemanがテストにパスすれば……、最終的な結果がもたらすものに影響をあたえることができたであろう」と語って、干渉しないという決定を覆すこともあったかもしれないと指摘した。

1984年に国連経済社会保障理事会が採択した死刑に直面している者の権利の保護に関する保障(Ecosoc決議1984/50)第4項は、「死刑は、起訴された者の有罪が、他に代わるべき説明となる事実の余地がない、明白かつ

説得力のある証拠に基づくときにのみ科すことができる」とする。この基準は、Coleman 事件では満たされなかったことを諸事情が示唆している。

死の前日までテレビのインタビューに答えて「自分の死を無意味なものにしないでほしい」と死刑制度を見直すように訴えていた Coleman は、処刑のために椅子に結わえつけられたときに「無実の男が、今夜殺されるのだ」、そして「私の無実が証明されたとき、アメリカ人はすべての他の文明国家と同様に、死刑がいかに正義に反するものであるかを判って欲しい」と話した。処刑後、刑務所の広報担当官が読み上げたコメントは「Roger Coleman は11時38分に絶命した。電気椅子に座った彼の最後の言葉は『あなたたちは今、殺人を犯そうとしている。それがいかに罪深きことかは、のちに明らかになるに違いない。Sharon, 永遠に君を愛している』。以上」であった。

注

- (1) *Texas Bar Journal*, Vol. 56, No. 2, 1993.
- (2) *The National Law Journal*, February 24, 1992の論文より引用。
- (3) *State of Louisiana v. Peart*, 346-331. (*The National Law Journal*, February 24, 1992 より引用)。
- (4) Coleman の冤罪の疑いについては、“MUST HE DIE?”, *Time*, 47-49, May 18, 1992, および「処刑の日は5月20日」*NEWSWEEK* (日本語版) 1992年4月30日/5月7日54-57頁。なお、田丸美寿々による処刑直前の Roger Coleman へのインタビューについては「無実の言葉を残して電気椅子に座った男」*ダカーポ*256号74-75頁。
- (5) 1992年5月22日、毎日新聞。1992年6月12日、日本経済新聞。

4 人種と死刑

黒人は合衆国人口の12パーセントを占めているに過ぎないにもかかわらず、1993年1月15日現在、合衆国にいる死刑囚2,676人のうちの1,047人(約40%)が黒人であった⁽¹⁾。死刑囚に占める黒人の割合がより高い州もいくつかある。人種に基づく犯罪者統計のみが偏見を示しているのではなく、死

刑裁判の被害者の人種を考慮にいと、死刑の不均衡が、より一層明らかになる。1992年に処刑された31人のうち25人は、白人の被害者が関係する犯罪で死刑を宣告された。1977年から1993年1月5日までに合衆国で処刑された189人のうちの152人(83%)は、白人の被害者を謀殺したとして死刑を宣告されたものである。死刑にみられる人種的不均衡は、多くの調査研究で支持されており、1990年2月に、合衆国政府の独立機関である連邦会計検査院（General Accounting Office: GAO）の調査結果がこれを確認している。連邦会計検査院の調査は、白人の被害者を謀殺して有罪を宣告された者は、黒人の被害者の殺人で有罪とされた者よりはるかに死刑を宣告されやすいことを明確にした。

いくつかの州では、死刑相当犯罪で起訴された黒人の被告人が、検察官が黒人陪審員候補者を故意に排除した全員白人からなる陪審によって有罪を宣告されることはありふれたことである。

4・1 Delma Banks のケース

Delma Banks は、1992年に7回もテキサス州で処刑されなかったが、彼の弁護人が Delam Banks に代わって提起した上訴により、その都度処刑の停止を得ていた。

黒人の Banks は、白人の Richard Wayne Whitehead を射殺したとして1980年に有罪を宣告された。彼は、検察官が理由不要の忌避(理由を示さないで陪審を排除する権利)を行って、陪審からすべての黒人の陪審候補者を排除し、全員白人の陪審により事実審が行なわれ量刑された。1993年初現在、この事件は Banks の弁護人が法的権利擁護団体である有色人種地位向上協会法防衛教育基金（NAACP Legal Defense and Educational Fund, Inc.）と共に行った最近の調査に基づいて提起した上訴に対する決定を待っているところである。この調査は、Banks の事実審が行われたテキサス州 Bowie 郡の検察官は、少なくとも6年前から Banks の裁判まで、審理陪審から黒人を故意に排除していたことを明らかにした。その結果、郡の人口

に占める黒人の割合は21パーセント以上であるにもかかわらず、黒人は郡の刑事裁判の審理陪審の2パーセント以下を構成するだけであった。NAACP 法防衛教育基金の代表者は、これは同組織が近年知った陪審選定における人種差別に関する強力な実例の1つであると語った。

合衆国最高裁判所は、1986年に *Batson v. Kentucky* 事件の判決で、合衆国憲法の平等保護条項により、検察官はいかなる場合も人種を理由として陪審員を排除できないと判示している。しかし、Batson 判決は過去の事件に遡及して適用されなかったため、Banks はその利益を受けることはできなかった。それにもかかわらず Banks の弁護人は、検察官が特定の管轄で、人種的な理由で陪審員を故意に排除したことが証明されたならば、有罪の決定の破棄を認めた合衆国最高裁判所の先例に基づいて上訴を提起した。この上訴は、1993年初現在、まだ決定が下されておらず、また、処刑が行われる前に審理が行われることもないであろうと予想されている。

1970年代に行われた人種差別に関する多くの研究は、テキサス州で白人の被害者を殺害した黒人は、白人の被害者のケースにおける白人被害者より、6倍も死刑を宣告されやすいことを明らかにした。

4・2 William Andrews のケース

黒人の William Andrews は、人種差別がその事実審に汚点を残したもののとして、国の内外から非難されたにもかかわらず、1992年7月30日にユタ州で処刑された。Andrews は、1974年4月に音響器具店での強盗の際の5人の白人被害者の謀殺事件で演じた役割によって死刑を言い渡された。被害者たちは残酷な目にあわされ銃撃されたのであった。主謀者とされ、被害者の銃撃の責任がある黒人の Dale Pierrre Selby は、死刑相当犯罪で有罪が確定し、1987年8月に処刑されている。

Andrews の事実審理は、犯罪のことをよく知っているコミュニティから選ばれた、全員白人の陪審により行われた。事実審の途中で、陪審は「黒人を吊るせ」という匿名の手書きのメモを受け取った。判事は陪審にメモ

を無視するように命じたが、これは量刑に影響を与えたに違いない。合衆国最高裁判所の2人の判事が、のちに、裁判所がこの過誤を治癒しなかったことに深い憂慮を表明した。

Andrews 個人の責任は主謀者の Selby より軽かった。証拠によれば、Andrews は Selby が主謀する仲間に加わることに気が進まず、殺人に加わることを拒否し、Selby が1人の被害者をレイプし、5人全員を殺害する前に音響器具店を出た。事実審の裁判官は Selby と Andrews の事実審を分離するようにという弁護側の数度におよぶ要求を退け、2人は1974年11月とともに事実審を受けた。ユタ州は、5人の被害者が射殺されたときに Andrews は犯行現場にいなかったことを何度も認めていた。ユタ州の恩赦・仮釈放委員会も1989年8月18日に2対1で Andrews の特赦の申し出を退け、1992年7月には事件の再審理のために会合を開くことも拒否したが、「Andrews 氏は最後の殺人を共犯者に委ねて立ち去り、強姦殺人が発生したときには現場にいなかった」と声明した。

Andrews は、犯行時19歳であった。貧しくて弁護人を依頼できず、事実審では1年前にロー・スクールを終えた実務経験のない裁判所選任の弁護人が代理した。この弁護人は、犯行の際の Andrews の役割が大きくなかったということを主張する弁護も行わず、軽減事由も提出しなかったといわれる。不十分な弁護の結果、手続的理由から上訴の際に裁判所はいくつかの重要な論点の提出を禁じた。

Andrews は処刑されたとき37歳であった。合衆国のどの死刑囚よりも長く、17年半以上も死刑囚として拘禁され、処刑までに6度死刑執行命令状を受け取っていた。Andrews は、ユタ州で直接に人を殺害しないで死刑を宣告された者であると報道されている。Selby との事実審の陪審は、彼の犯罪への関与の程度が誇張されていると考えたかもしれない。ユタ州はこの点を認めていた。

- (1) 資料は、有色人種地位向上協会法防衛教育基金 (NAACP Legal Defense and Educational Fund, Inc., New York) による。なお、1993年1月に公表された統計によれば、人種状況は以下のようである。1,353人 (50.56%) が白人、1,047人 (39.13%) が黒人、195人 (7.29%) がヒスパニック、48人 (1.79%) がアメリカ原住民、20人 (0.75%) がアジア人、残りが不詳であった。

5 精神障害者・精神薄弱者の処刑

1992年に、少なくとも6人の精神病、脳障害あるいは精神薄弱の囚人が、1989年5月に採択された「精神薄弱あるいは極度に限定された精神能力の者に対する死刑の排除」を勧告した、国連経済社会理事会の決議 (1989/64) に反して処刑された。

1989年6月、合衆国最高裁判所は *Penry v. Lynaugh* 判決で、精神薄弱の被告人の処刑を合衆国憲法は絶対に禁止しているものではないと判示した⁽¹⁾。しかし、死刑裁判の陪審は、量刑審理の際に可能な減刑事由として減退した精神能力について知らされなければならないとした。Penry 判決にもかかわらず、合衆国の5州——ジョージア州、メリーランド州、ケンタッキー州、テネシー州およびニューメキシコ州——は、最近精神薄弱者の処刑を禁止する制定法を可決した。

5・1 1992年に処刑された精神障害者・精神薄弱者

Johnny Garrett のケース——白人の Johnny Garrett は、精神障害者で、慢性の精神病で、脳に障害を有する少年犯罪者であったが、1992年2月11日にテキサス州で処刑された。彼は、1981年10月に76歳の白人の修道女を強姦殺人し、1982年9月に死刑を言い渡された。犯行時17歳であった。彼は、精神病の長い病歴をもち、児童期に肉体的および性的な虐待を受けていた。精神医は彼をいままで診察したなかで「最も精神的な障害が酷い被収容者の1人である」と表現し、心理学者は「28年以上にわたる実務経験のなかで出会ったなかで、虐待を受け遺棄されたもっとも過酷な生い立

ちの1人である」と述べた。テキサス州恩赦・仮釈放委員会は、殺害された修道院の修道女や他の宗教的指導者の訴えにもかかわらず、特赦を認めなかった。

Nollie Martin のケース——1992年5月にフロリダ州で処刑された白人の Nollie Martin は、知能指数が59で、子どものときに受けたいくつかのひどい脳傷害の結果、精神に障害をきたしていた。精神病と自殺したい衝動に駆られる抑鬱と自傷の病歴があり、幼児のときから身体的および性的虐待を受けていた。1978年11月に、白人女性の誘拐、強盗殺人で死刑を言い渡された。

Cornelius Singleton のケース——黒人の Cornelius Singleton は、1992年11月20日にアラバマ州で処刑された。彼は、白人のローマカトリック教会の修道女を謀殺して、1977年11月に死刑を言い渡された。Singleton は、知能指数が58ないし69に精神薄弱者であった。彼は、死刑を言い渡す評決の際に、精神薄弱に関する情報を与えられなかった全員白人の陪審により審理された。この判決は後に破棄されたが、陪審なしの単独の判事により再び死刑を言い渡された。報告によれば、彼の精神薄弱に関するいくつかの証拠が、この第2回目の審理に提出されたが、否認されたということである。

Donald Harding のケース——白人の Donald Harding は、1980年に2つの事件で3人の男性を謀殺して死刑を言い渡され、1992年4月6日にアリゾナ州で処刑された。Harding は虐待され遺棄され、幼児期に実母と継父の間のひどい暴力沙汰を目撃していた。彼は9歳のときに手首を切って自殺をはかった。Harding を診察した数人の精神医は、一致して攻撃的および暴力的衝動を統制することができず、とくにアルコールあるいは鎮静剤の影響下にあるときに適切な行為をすることができない器質的脳機能障害であるとした。他の専門医は、16歳から24歳の間に成人刑務所で受けた残酷な処遇や性的暴行の結果、外傷後ストレス性障害にかかっているとした。

Ricky Grubbs のケース——白人の Ricky Grubbs は、1992年10月20日にミズリー州で処刑された。彼は酩酊状態で白人の Jerry Thornton を謀殺し、1986年5月に死刑を言い渡された。彼の精神薄弱に関する重大な軽減事由を弁護人は調査せず、その結果、死刑を言い渡す陪審に提出されなかった。1992年の宣誓供述書で、1985年に Grubbs を診察した裁判所選任の精神医は、Grubbs が境界域の精神薄弱であることを示す情報や、あるいは少年時代にずっと心理学的なテストを受けたいという学校の記録にアクセスすることを許されなかったと述べた。この情報の欠如は、彼の報告書が「起訴時に、Grubbs 氏の精神能力の完全かつ性格な評価を与えていなかった」ことを意味する。彼の宣誓供述書は、「上の情報によれば、重大な酩酊と低劣な知的機能要因が組み合わされ、Grubbs 氏は死刑に相当する謀殺に不可欠な精神的な意図を構成することができなかったと考える……」とし、「上訴人 Ricky Grubbs 氏は、自身の行為を慎重に熟慮し、冷静に反省する精神能力を欠いている」と結論した。

Ricky Ector のケース——黒人の Ricky Ector は、1992年1月24日にアーカンソー州で処刑された。彼は1981年11月の白人の警官 Bob Martin の謀殺で、1982年に有罪を宣告された。

Bob Martin を射殺後、Rector は自分の頭を撃って自殺しようとした。弾丸による外傷と Rector の頭部から弾丸を摘出する手術の結果、脳(前葉頭)に3インチの欠損が生じた。その結果記憶障害に悩み、診断によれば精神能力がひどく限定されていることが明らかになった。1991年6月24日、有罪と死刑を連邦が再審理するよう求めた最後の上訴を合衆国最高裁判所は退けた。Thurgood Marshall 判事は、最高裁判所を退任する3日前に長い反対意見を書き、最高裁判所は処刑のための精神障害あるいは精神無能力の総合的な定義を決定するために、Rector の上訴を認めるべきであるとして、「このような者を死刑に処することができるかどうかの問題は、これらの者の能力の低下が、これらの者を非難する法あるいは社会の同情に訴えることができなくしていることが、この国の死刑の適用の中心にあること

は避けがたいことである」と結論した。

Rector の処刑は、死刑のもっとも残酷さを示す方法で行われた。処刑の立会人は、技官が１時間ばかりかかって致死薬を注射するための適当な血管を捜し当てる間、処刑室から呻き声と叫び声を聞いたと報告した。Rector は何かを感じとり、作業を行っている処刑チームに助けを求めたことは明らかである。1992年 1 月26日付の州の新聞 *Arkansas Democrat Gazette* は、アーカンソー州矯正局の医薬部長 John Byus の「われわれは針をさしつづけるということはしなかった。新しい血管をさがしていた。次の血管がと思っていた……。その血管を見つけたと思ったが、刺せなかった。これは異常なことだった。しかし、その異常なことが起きたのだ。彼の血管は、簡単にこわれるもろいものであった。われわれは血管を捜した。結局、運よく血管を見つけることができた」という談話を掲載した。

5・2 ルイジアナ州最高裁判所判決——*Michael Owen Perry* 事件

1992年10月に、ルイジアナ州最高裁判所は、5対2で、精神無能力の囚人に処刑のために正常な精神能力にするという理由だけで薬物を施用することはできないと判示した。この判決は、合衆国最高裁判所に提出された *Michael Owen Perry* 事件を含む問題を解決したものであった。

Michael Owen Perry は、両親と3人の親族を謀殺して有罪を宣告され、1984年にルイジアナ州で死刑を宣告された。*Perry* は裁判を受ける精神能力はあるとされたが、拘禁されている間、幻聴、パラノイアおよび妄想を含む精神病の定期的な発作に苦しみ、定期的に向精神薬療法を受けていた。

1986年に合衆国最高裁判所は、精神障害の囚人の処刑は、合衆国憲法修正第8条に反する「残虐かつ異常な」刑罰であると判示した。*Perry* の精神病に関する証拠を審理した後、ルイジアナ州最高裁判所は1987年に彼の有罪と死刑は認めたが、事実審裁判所に処刑されるに足る精神能力があるかの問題を審理するように命じた。合衆国の制定法による精神能力の基準は、死刑囚は死刑とその理由を理解しなければならないとする。証拠を審理し

た後、事実審裁判所は、Perry は重い精神分裂病に罹っているが、「ハルドール (Haldol: 向神病薬) による向精神薬療法を維持するときのみ」上の基準に合致するように十分に安定した状態を得ると結論した。裁判所は、必要ならば Perry の意思に反しても、処刑のために正常な精神能力にするという理由だけで、継続的な療法を行うように命じた。

Perry の弁護人は、処刑のために正常な精神能力にするという理由だけで囚人に強制的に療法を施すことは、合衆国憲法修正第14条の適正手続条項に反すると主張した。この上訴におけるその後の論争は、精神病の囚人に医学的処置を与えずにおくことは修正第8条に反する残虐かつ異常な刑罰であり、それゆえに唯一の適切な判決の方向は Perry の死刑を終身刑に減刑し、彼を病院に収容して処遇することであった。

合衆国最高裁判所は、この事件に対する判断は下さなかったが、その年の死刑相当犯罪ではない *Washington v. Harper* 事件の先例によって再審理するためにルイジアナ州最高裁判所に事件を差戻した。この事件では、他害、自傷を引き起こすような精神病に罹り、その処遇が囚人の医学的な利益であるならば、囚人の意思に反しても抗精神病薬による強制的な療法を行い得るとしたものであった。

Perry が薬物の使用なしで精神能力を回復すべきであるとするならば、処刑の可能性は得られないままになるが、1992年10月のルイジアナ州最高裁判所の判決は、Perry に強制的に薬物を飲用させることは、そのプライバシーの権利と残虐かつ異常な刑罰からの保護を侵害し、ルイジアナ州憲法に反するとした。

注

- (1) 辻本義男「アメリカ合衆国の死刑状況 (その2) —1988年・1989年」中央学院大学法学論叢 6 巻 1 号49頁以下 (1992年)。

6 州の立法およびその他の進展

死刑廃止全国連合（National Coalition to Abolish the Death Penalty: NCADP）によれば、1992年に38州で172の死刑に関する法案が提出された。1992年11月までにこのうちの9つが可決され、3つが州知事の拒否権にあった。そのなかにはニューヨーク州における死刑の再導入法案があった。残りの法案は、否決されたか1993年に持ち越されるか、無期延期となった。大部分の法案は、死刑が適用される犯罪の数を増やすことを提案し、上訴と処刑の手續の促進を求めたものであった。

ジョージア州、ミシシッピー州、オハイオ州およびペンシルバニア州の4州が、犯行時18歳未満の者の処刑を禁じる法案を考慮し、アリゾナ州、コロラド州、デラウェア州、フロリダ州、アイダホ州、イリノイ州、ルイジアナ州、ミシシッピー州、ミズリー州、ノースカロライナ州、オハイオ州、ペンシルバニア州、サウスカロライナ州、およびワイオミング州の14州が、精神薄弱者の処刑を禁じる法案を討議したが、そのいずれも成立しなかった。ただ、サウスカロライナ州では、精神薄弱者の処刑を禁じることを提案した法案は成立しなかったが、軽減事由として考慮すべき精神薄弱の証拠を要求する修正法が可決された。

アリゾナ州、カリフォルニア州、デラウェア州およびワイオミング州の4州が、25年以上の空白後はじめて処刑を行った。（デラウェア州は、1992年3月に46年ぶりに処刑を行った）。

アリゾナ州は、1992年11月の州民投票で、州の処刑方法をガス室から致死薬注射に変更する法案を承認した。この変更前に死刑を宣告された囚人は、致死薬注射かガス室のいずれかを選択できた。

6・1 コロンビア特別区における死刑に関する住民投票

1992年11月初の住民投票で、コロンビア特別区の投票者は、特別区に死刑を再導入する上院提案の法案を圧倒的多数で否決した。この住民投票は、

提案に反対することができない広範囲におよぶ地方の議員から反対が寄せられていた最中に行われた。

1992年9月初に、特別区における暴力犯罪の異常な動向と、その増加に
 応えて⁽¹⁾、合衆国上院は、特別区への死刑の再導入の提案に関する住民投票
 法案を可決した。コロンビア特別区は、合衆国政府の所在地で、ワシント
 ン市を含む。その土地に限定された問題に関する立法権を有する選出され
 た市長と官吏がいるが、合衆国上院は特別区の法律を制定し、コロンビア
 特別区議会が提案した法律を拒否し、あるいは破棄する権限を有している。
 コロンビア特別区は、1972年に州の死刑法を無効とした合衆国最高裁判所
 の判決（*Furman v. Georgia* 判決）——当時の制定法によって死刑を科すこ
 とは、「残虐かつ異常な刑罰」であると明言した——の後、死刑を再導入し
 なかった15の法域の1つである。1981年に、コロンビア特別区議会は死刑
 法を廃止した。最後の処刑は1957年に行われた。

「現在死刑の適用がない犯罪にその適用を拡げてはならない」とした米
 州人権条約第4条(2)に明白に抵触するこの法案は、コロンビア特別区にお
 ける第一級謀殺に対する刑を必要的死刑あるいは仮釈放なしの終身刑に引
 き上げようとするものであった。この提案に対する批判は、法案の草案が、
 「薬物密売の際に、あるいはそれを幫助して死に到らしめた行為」を含む、
 死刑に相当する犯罪に関し14の加重事由を列記したものであり、現在、第
 二級謀殺あるいは故殺に分類されている行為までも含む殺人に対し死刑を
 認めようとしたものであると指摘した。この法案は、国際法が禁じている
 精神薄弱者あるいは少年（犯行時18歳未満の者）の処刑を禁じていなかった。
 処刑の方法や場所も特定されなかったが、法案は裁判所が処刑が行われる
 べき合衆国の州を明示することを定めた。

非公式の報告によれば、投票者の67パーセントが、この国におけるこの
 種の最も広範囲に及ぶ死刑の発議を拒否したといわれる。

1992年には2件の特赦が認められた。1月23日に、処刑予定の数時間前にバージニア州のWild知事がHerbert Bassettの死刑を終身刑に減刑した。黒人のBassettは、16歳の黒人のガソリン・ステーションの店員Albert Burwellを謀殺して有罪を宣告されたが、どの証拠も彼を犯罪と結び付けることはできなかった。3人の共同被告人も死刑相当の謀殺で起訴されたが、Bassettに対する証言と引換えに有利な処置を受けた。2人は、謀殺の教唆犯として有罪の答弁を認め、1年の執行猶予が言い渡され、他の1人は単なる教唆に過ぎないとして無罪とされた。Bassettの最初の審理陪審は、有罪も無罪も決定することができなかったが、第2回目の事実審で、有罪を宣告され、死刑を言い渡された。Bassettは終始謀殺への関与を否定し続けた。Bassettの死刑を減刑する決定を公表する声明の中で、Wilder州知事は「死刑という極刑は、起訴された犯罪を犯したことが合理的な疑いを越えて示された者にのみ適用されなければならない……。Herbert Russel Bassettの弁護人が私に提出した、評決を求められた際に陪審の前に提出されていなかった証拠を含む証拠を完全に見直した結果、……私は合理的な疑いが確かに存在することを拭うことができず、私に州知事として介入することが認められた権限を行使しない訳にゆかなくなった」と述べた。これは、Wilder州知事がその任期中に認めた2回目の減刑であった——Joseph Giarrantanoの死刑は、1991年2月20日に州知事により減刑された⁽²⁾。

Anson Avery Maynardはノースカロライナ州Dunn出身のコハリエ・インディアンであった⁽³⁾。彼は行政特赦を認められ、1992年1月10日に死刑が仮釈放なしの終身刑に減刑された。Maynardは、1981年に白人男性のSteven Henryを謀殺し、1981年1月17日に処刑されることになっており、現行の合衆国制定法により処刑される最初のアメリカ・インディアンになるはずであった。James Martin州知事は、Maynardの有罪は疑わしいとして行政特赦を認めた。彼を犯罪に結び付ける何の身体的な証拠もなく、証言をした唯一の証人は、検察官から免責を認められた謀殺への関与を自

認した者であった。

これは1976年に死刑が再導入されて以来、ノースカロライナ州知事が死刑を減刑した最初の例であった。ノースカロライナ州は、現行死刑法により女性1人含む5人の囚人を処刑している。

1992年1月10日に、減刑を公表した声明の中で、James Martin 州知事は「すべての主張と反論を広い範囲にわたって検討した結果、私は Anson Maynard が Stephen Henry 殺害の引き金を引いたと確信できない。Anson Maynard は完全に無実と私は確信し……、同時に真実に到達した陪審の努力に感謝する。1981年に陪審に提出された証拠には多くの矛盾するものがあった。私たちは、陪審が見聞きしたものに基づいて、到達した当時の決定に敬意を払う。私の決定が陪審の量刑を変更したのは、時の経過の恩恵と、陪審が用いることができなかった情報によるものである。Anson Avery Maynard が Stephen Henry 殺害に関与していた程度が、死刑を正当なものとするに十分かどうかについて、私の心の中に合理的な疑問が生じた。そのために、私は Anson Maynard の死刑を仮釈放なしの終身刑に減刑したのである。特赦の権限が州知事に与えられているのは、このように事件に対してである」と述べた。

6・3 Robert Anton Harris のケース⁽⁴⁾

カリフォルニア州は、1992年4月21日に、1967年以来25年ぶりに処刑を行った。この処刑は、弁護人がガスによる処刑は合衆国憲法が禁じている「残虐かつ異常な」刑罰であるという論争を含む上訴を提起したので、Robert Anton Harris が死刑に処せられることになっていた6時間以内に行われた、一連の最後の苦闘の瞬間に4度も処刑が延期された。最後の延期は、立会人によれば、シアン化物の球粒が部屋に放出された後、Harris がガス室の椅子にゆわえつけられていたときに行われた。Harris は急いで椅子から解き放たれ、控え室に連れていかれた。しかし、合衆国最高裁判所が最後の執行停止を退け、下級裁判所への今後の上訴を禁止した2時間

後に処刑室に戻された。ガスによる処刑が残虐かつ異常な刑罰であるかどうかを決めるため、連邦判事の命令によって処刑の様子がビデオにとられた。

Harris は、1991年12月にこの事件につき評決した第9巡回控訴裁判所判事の半分が、原審で効果的な精神医の援助を受けていなかったかどうかを決定するために、合議体の法廷での審理を認めるべきであると考えていたといわれる事実があったにもかかわらず、処刑されたのである。

新聞報道によれば、評決には1人の判事が加わらなかったので13対13の同数であったといわれる。1992年3月2日に、合衆国最高裁判所は Harris の上訴の許可を求める請願を棄却した。1992年3月13日、司法長官が召集した審問会は Harris の処刑の日を決定した。

Harris は、1978年7月に2人の10代の少年の誘拐、強盗殺人で有罪を宣告され、1979年3月6日に死刑を宣告された。Harris の事実審の陪審が用いることができなかった胎児期アルコール症候群(FAS)と、児童虐待と器質的脳障害を含む新しい証拠が、特赦を認める強力な根拠として提出された。Harris は、母親が夫に腹部を蹴られたため、2か月以上も早く産まれた。両親はアルコール中毒であった。2歳のとき、父親に気を失うまで殴打され、病院で治療を受けた。児童期にはずっと父親と継父に殴られていた。Harris が9歳のとき、父親は娘に対する性的虐待で有罪を宣告され、拘禁された。

14歳のとき、Harris は母に遺棄され、しばらく彼の兄弟の家の近くで苦しい生活をし、その後オクラホマ州の姉妹の所に居座ろうとした。15歳のときに、他の者と盗んだ車を運転していて逮捕された。他の者は家族が無罪を主張したが、彼は無罪を主張する者もなく、連邦のユース・センターでの4年の保護を言い渡された。そこで、彼は精神病の素質があり、精神分裂、自殺および自傷のおそれありと診断された。19歳のときに、精神保健上の問題で処置を受けるようにという勧告付で釈放されたが、処置をうけた証拠はない。

死刑の言渡後に Harris が受けたテストは、行為の反省、良心の悩み、合理的な計画、組織あるいは理由づけの能力に影響するとおもわれる前葉頭の障害を見出した。胎児期アルコール症候群と児童期に受けた身体的な殴打に加えて、Harris は 8 歳か 9 歳の頃からガソリン、接着剤および有機溶剤を吸入していたことが知られている。Harris の事実審の陪審は、彼の少年期の虐待と精神無能力を完全に知らされていなかった。

第 9 巡回控訴裁判所が 13 対 13 の同数の評決になったのは、上の証拠を審理した後であった。このことは、事実上、Harris の弁護人が求めた完全な証拠審理を認めることを拒否したことを意味する。John Noonan 判事（さきに Harris の請願を審理した 3 人制の裁判官のうちの 1 人）は、Harris は終身刑でなく死刑を言い渡した陪審の決定に関し「根本的な公正」の問題を提出したと述べた。

同数の評決の後、Stephen Reinhardt 判事は少数意見で「たとえば……、法廷の構成員の半分以上が、法は人命を奪うことを禁じていると確信しているこの事件で、われわれは実際に人命を奪うことを正当化することができるのか。双方に正当な議論があり、その決定が容易に反対に揺り戻されるかもしれないときに、終身刑か死刑かを多くの判事の中の 1 人の判事の票に依存させることが正当であろうか」と述べた。

注

- (1) 1992 年 8 月に公表された FBI の統計によれば、1991 年における暴力犯罪は記録的なレベルを示し、ワシントンは大都市の中で最高の謀殺率を示した。
- (2) 辻本義男「アメリカ合衆国の死刑状況（その 3）」中央学院大学法学論叢 6 巻 2 号 56 頁（1993 年）。
- (3) 1992 年 3 月 3 日にテキサス州で処刑された Edward Ellis は、現行の死刑法により合衆国で処刑された最初のアメリカ・インディアンであった。辻本義男「アメリカ・インディアンと死刑」中央学院大学法学論叢 7 巻 1 号 12 頁以下（1993 年）。
- (4) Robert Anton Harris については執行の延期が 4 度も行われ、カリフォル

ニア州では25年ぶりの死刑執行であり、そのうえ死刑執行の現場の撮影を求めたテレビ局があったなどから多くの報道がなされた。「カリフォルニアで23年ぶりガス室待つ少年殺しのハリス」アエラ 1990年3月20日66-67頁、「死刑がTVで公開される?」NEWSWEEK 1991年4月18日52-53頁、「これが死刑執行だ」刑政103巻1号(1992年)、「暁の死刑執行 R.ハリス、最後の12時間」刑政103巻7号(1992年)、「加熱する死刑執行推進論」時の法令1379号(1992年)、「生と死の間をゆれ動く米の死刑執行」法学セミナー451号(1992年)など。なお、死刑執行の現場の放映に関しては、辻本義男「死刑の執行を報道する権利」中央学院大学総合論叢2号(1994年)参照。

7 1992年に処刑された死刑囚

処刑日	1977年 以降の 累計	氏名	州	人種	被害者 の人種	備考
1月22日	158	Joe Angel Cordova	テキサス	H	H	
1月22日	159	Mark Hopkinson	ワイオミング	W	W	
1月24日	160	Ricky Rector	アーカンソー	B	W	BD
2月11日	161	Johnny Garrett	テキサス	W	W	Juv/ MI/BD
2月28日	162	David Clark	テキサス	W	W	
3月3日	163	Edward Ellis	テキサス	N	W	
3月10日	164	Robyn Parks	オクラホマ	W	Asian	
3月13日	165	Olan Robinson	オクラホマ	W	W×3	
3月14日	166	Steven Pennell	デラウェア	W	W×3	
3月20日	167	Larry Heath	アラバマ	W	W×3	
4月6日	168	Donald Harding	アリゾナ	W	W×2	
4月21日	169	Robert Harris	カリフォルニア	W	W×2	BD
4月23日	170	William White	テキサス	B	W	
5月7日	171	Justin Lee May	テキサス	W	W	
5月7日	172	Steven Hill	アーカンソー	W	W	
5月12日	173	Nollie Martin	フロリダ	W	W	MR
5月20日	174	Jesus Romero	テキサス	H	H	
5月20日	175	Robert Black	テキサス	W	W	
5月22日	176	Roger Coleman	ヴァージニア	W	W	

7月21日	177	Edward Kennedy	フロリダ	B	W×2	
7月23日	178	Edward Fitzgerald	バージニア	W	W	
7月30日	179	William Andrews	ユタ	B	W×3	
8月11日	180	Curtis Johnson	テキサス	B	W	
9月11日	181	Willie Jones	ヴァージニア	B	B×2	
9月22日	182	James Demouchette	テキサス	B	W×3	
10月21日	183	Ricky Lee Grubbs	ミズリー	W	W	MR
10月23日	184	John Gardner	ノースカロライナ	W	W×2	
11月19日	185	Jeffery Griffin	テキサス	B	B×2	
11月20日	186	Cornelius Lincecum	アラバマ	B	W	MR
12月10日	187	Kevin Lincecum	テキサス	B	W×2	
12月10日	188	Timothy Bunch	バージニア	W	Asian	

略語 B=黒人、W=白人、H=ヒスパニック、N=アメリカ原住民、MR=精神薄弱、MI=精神病、BD=脳障害、Juv=少年。